

美術の窓(130)

夏祭りの灯籠絵

大和文華館館長 浅野秀剛

なら燈火絵も、8月の奈良の行事としてすっかり定着したようだ。若い男女が浴衣姿で灯りを楽しむ姿を見るのは何となく心が安らかになる。近年は、全国的に灯りをメインにした夏祭りが創設されたり、復活している。それは、12月にイルミネーションが流行っていることと軌を一にしていると思うのであるが、それはさておき、祭りの灯りといえば、灯籠に止めをさす。奈良の町は春日灯籠を例に出すまでもなく、灯籠と縁が深い。灯籠に絵が描かれると、絵灯籠(灯籠絵、行灯絵)となる。江戸時代の祭りには、灯籠が欠かせない。電気のない時代、夜の明かりは、油か蠟燭で取るしか方法がなかったからである。したがって、灯籠絵も今よりはるかにたくさん作られた。

7月20日、思うところがあって、高知県香南市赤岡町を訪れた。絵金祭りを見るためである。幕末の土佐に、「絵金」と通称される絵師がいたことを知る人はまだ少ないであろう。絵金は、町絵師として土佐一帯の祭りに用いた芝居絵屏風をたくさん描き、今も、高知県の各地の夏祭りで、その屏風が飾られ続けている。絵金の絵は、浮世絵とも非常

に近く、独得の魅力(魔力?)がある。一昨年、高知県立美術館で大規模な絵金展が開催され、昨年暮に別件で高知を訪ねた折、赤岡の「絵金蔵」(絵金美術館)に初めて行ったこともあって、一度は祭りを見ておかねばと思ったのである。絵金祭りとは、1977年に、香南市赤岡町の商工会が、赤岡町・須留田八幡宮(すだはちまんぐう)の祭りにならって始めたもので、芝居絵屏風を商店街に飾るのをメインに、土佐絵金歌舞伎などさまざまな催し加わっている。屏風・絵馬提灯の展示は夜の7時からである。絵金の屏風とともに飾られ、地元で絵馬提灯と言っているものは、灯籠絵である。扁平な直方体を組み、そのぐるりに紙(絹の場合もある)を貼り、主として広い面に絵を描き、中に蠟燭を入れて(今は電球であるが)灯すのである。

絵金祭りの絵馬提灯「義経千本桜」(図1)は65×83cmであるが、時に、幅2mに及ぶ大燈籠も作られた。江戸時代の大燈籠絵の遺品はほとんどないが、千葉市美術館には、200年以上前の大燈籠絵が十数点所蔵されている。津和野藩(島根

県)亀井家の江戸屋敷に保管されていたもので、現在は掛軸になっているが、最も大きい歌川豊国筆「海浜遊歩図」(図2)は約120×200cmもある。図3は、豊国とほぼ同時代に活躍した浮世絵師、鳥文斎栄之が描いた浮世絵版画「小舟町天王祭礼図」に描かれた大燈籠(部分図)で、祭りの様子を彷彿とさせる興味深い作品である。その絵に描かれているのは、素戔鳴尊(すさのおのみこと)の八岐大蛇(やまたのおろち)退治である。下方には八つの瓶の飾り物も吊り下げられている。江戸時代の灯籠絵は、主として浮世絵師などの町絵師によって制作されたと思われるが、ほとんどの場合、その時限りのものだったので、特別なことがないと残らない。もったいないと言う人もいるが、それが祭りの本質であり、それだからこそ人々は燃えるのだと思う。

私の郷里は、秋田県の能代であるが、その夏祭りは、役七夕とも呼ばれる「ねぶながし」である。城郭型灯籠の上に鯨を載せ、電線の下では鯨を倒しながら運行する様(図4)は、子ども心によく覚えている。近年、非常に有名になった青森のね

ぶたも造形型灯籠を運行する祭りで、「ねぶ」という共通する名称とともに、同根の祭りであることは確実であろう。しかも、能代ねぶながしは、確実に十九世紀前半まで遡ることができるという点で、古くかつユニークであると思っている。

能代ねぶながしの城郭型灯籠や青森ねぶたの造形型灯籠も、灯籠絵の一種であることはいうまでもない。

※挿図出典

図1:『絵金 極彩の闇』(grambooks, 2012)から複写、図2:『千葉市美術館所蔵浮世絵作品選』(2001)から複写、図3:『東洋文庫名品展』図録(2003)から複写、図4: 能代市観光振興課提供

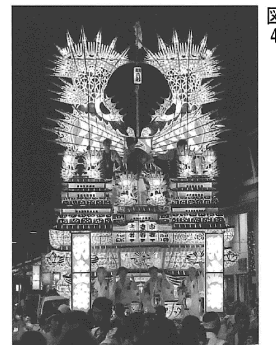
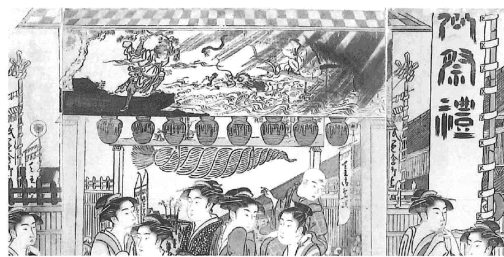


図3

図1



図2



季刊 美のたより No.188

平成26年10月31日

発行 大和文華館